



国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は十九ページまでである。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験番号が正しいかどうか受験票と照合し確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は楷書で正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ここ三十年間、表現において、わかりやすいことはよいことであった。やさしく、読みやすい文章が歓迎され、議論には具体例を添えることが要求された。図版や写真があればなおいっそう喜ばれる。抽象的な事柄を無駄なく表現したような文章がまるで悪者のように見られる。

a、文章は知らず知らずのうちに冗長になった。背後には読者の理解力に対する蔑視が含まれていたわけで、そういう消化力の弱い読者に食べさせるには硬いものは無駄だ、オカユのように嘔まないのみこめるものでなくてはいけないというので、わかりやすい表現が奨励されることになったのだろう。もともと、かつてのあまりにも観念的で生硬な文章に対する反動ということもあった。しかし、オカユばかり口にしていううちに読者は嘔む喜びを忘れるようになる。イマジネーションを失った読者があらわれたのである。

そこへもってきて映像文化の発達が、何でも見られる、あるいは、見たように感じられる世の中にした。英語に「見ることは信じること」(X)という諺ことわざがあるが、目に見てからでないとわかったような気がしない視覚タイプの人間が多くなつた。文章を読んでもそこからすぐ情景を心に描くのではなく、既往の経験、パターンをまず連想し、それをもとにして表現に向う、具体先行の認識である。小説や旅行記ならこれでもいいが、言論思想についても同じやり方でわかろうとする読者があるのは問題である。だから社会面はわかつてても社説はわからない。

しかたがないから、思想の表現も暗々のうちに人間関係の枠組みの中でなされるようになる。わかりやすい表現という考えは思いもかけぬ落とし穴があったわけだ。

ゴシップやスポーツ記事のわかり方は既知によって理解する方式である。こういう読み方をかりにアルファ読みとすれば、アルファ読みでは、読者にとって未知の世界のことは理解できない。もしアルファ読みしかできない人がいるとするならば、その人は自己の小さな経験世界から外へは出られないことになるはずだ。実際にはそういうことはごく稀であつて、たいていは大なり小なり未知を読む力をもっている。この未知を読むのをベータ読みと名づけると、人類が独自の言語文化を築いてきたのも

人間にベーター読みの能力があるからだと考えられる。

われわれは、はじめから一足飛びに未知の世界に参入できるわけではない。

b

、アルファ読みにある程度習熟して、

現実から表現への連絡を確実にし、事物の論理と言語の論理の相関関係を直観的にとらえた上ではじめて、既知から未知への飛翔を試みる。そのとき翼の働きをするのがイマジネーションである。ここでも経験、人間関係のパターンがまったく不用になるわけではないが、より重要なのは言語形式のパターンとそれが表現しうる思考の内容である。

アルファ読みは主として人間的ストーリーリーによってわかって行く理解であるから、擬人的思考から無縁になることはできない。AとBとが対立概念であるというときにも、これをAという人間とBという人間が敵対関係にあるというような比喻によってとらえがちである。それに対してベーター読みはいわば幾何学的思考である。AとBとの関係に敵、味方という人間関係をもちこまないで、Aと非A、AとマイナスA(B)といった抽象的關係でとらえる。

具体的でわかりやすい表現を求めるのに急であつた戦後の文化の中で、ベーター読みは衰微し、抽象思考のおもしろさ、純粹の美しさが見失われるようになってしまった。すべてが人間的、あまりにも人間的に表現され、理解されているために、論争というような、本来ならば純粹思考の次元において行われるべきことすら、ほとんどゴシップと紙一重の興味でしか受けとめられない。われわれは思想の基盤を失いつつあると言つてもよい。

ここで、アルファ読みからベーター読みへの転換と、それが現代においていかに困難であるかの問題について考えておかななくてはならないであろう。

われわれがはじめて文字を読むことを覚えるとき、それは当然アルファ読みで、音読はその典型的な様式といつてよい。書いてあることはわかっているが文字がわからない。文字が読めればそれで読みは完了するのがアルファ読みだ。これだけに留まっていたはならないからベーター読みに移るわけだが、いつどのようにしてベーター読みができるようになるのか、ふりかえってみてもはっきりしないことが多い。母国語のありがたいところで、ある年齢に達するとたいいていの子供が **A** ができるようになっているのはおどろくべきことである。そこには大人のうかがい知ることのできない神秘が働いているのかも知れない。

教育はほんのすこしその神秘のお手伝いをしているにすぎないから、あまり大きな顔をするのは禁物である。

アルファ読みからベータ読みへ移る飛び石には文学作品がもつとも適している。たいていは物語などを夢中になって読んでいるうちにベータ読みを身につけるようだ。昔の親たちは子供が小説を読むことを嫌ったが、そうするとよけいに隠れても読みたいのが人情で、その隠れ読みが未知をのぞくベータ読みの刺激になった。世の中が子供の読書に寛大になって、スリルのあるベータ読み入門のひとつが失われてしまった。同じ隠れ読みでもいまの漫画は絵がついているから、ベータ読みの手引にはなりにくい。

ところでなぜ文学作品がアルファからベータへの切り換えに適するかであるが、文学は一応はアルファ読みもでき、深く読めばベータ読みになるという妙味があるからにほかならない。

c、それがかえって仇になって、アルファ読みで終始するのがよいという実感尊重主義がベータ読みへの移行を阻止することになりやすい。それで文学少年少女はできても未知を読む読者については育てられないことになる。これは文学読者をふやして、一見いかにも文学にとって好都合のようではあるが、必ずしもそうではない。本当のベータ読みができない読者を相手にしては、文学も虚構の中を大きく飛びまわることができなくて、現実には足をひっぱられがちになる。文学は **B** の入口としてすら役立たなくなりつつある。それは文学のためのみでなく、文化全体にとっても由々しき事態であると言わなくてはならない。

ベータ読みへの切り換えが起るのは文字を読むようになってからであるのは当然だが、実は、同じような転換がそれ以前に一度起っている。もちろん就学前の幼児であるから、読みではなく、理解についてはあるが、アルファ型からベータ型への移行が認められるのである。

生まれてから二、三十カ月たてば子供はものを言うようになるが、そのときの言語はものごとくに即した、現実先行の言葉である。したがってその理解はアルファ理解ともいうべきものだ。これがベータ理解に切り換えられないと高度の言語活動はできないわけで、すべての子供は程度の差はあっても、**d** 必ずベータ理解ができるようになるものである。このときのアルファからベータへの転換の踏み台になるのがおとぎ話である。おとぎ話も文学作品と同じように、本来はベータ理解の

対象なのだが、一応はアルファ理解でもわかるように感じられるという特性をもっている。

制度としての教育がほとんど考えられていないような時代、社会においても、なお、幼児におとぎ話の類を与えることが広く行われてきたのは、これが人間の精神発達にいかにか大きな効用をもっているかが経験によって承認されていたと考えるほかはない。おとぎ話をおもしろがって聞いているうちに、子供は超経験、未知、抽象などの原型を習得して行く。そしてそれが生涯の思考や認識を決定づけるほどの持続的影響力をもつ。そういう角度から、三つ児の魂百までも、という言葉を解することもできる。

ところが、近年の映像文化において、おとぎ話の影が薄らこうとしている。元來は耳の言葉で語られるべき世界が視覚化して、したがって、十分に抽象に高められないでいることがすくなくない。大人になってから **C** に弱い人が多くなっているひとつの原因は、おとぎ話、童話によるベーター理解への移行がうまく行われていないことに求められるのではなからうか。幼児の教育においてとくに考えるべき問題である。

かりに幼児においてベーター理解がかなりできるようになっていても、 **e**、文字を読む段階に入ってからアルファ読みからベーター読みへの切り換えはなかなか困難なものであつて、うまく行かないのは何も現代だけに限ったことではない。教育や文化もそれをいかにして可能にするかの方法論であると言えないこともないのである。母国語はアルファ読みにはこの上ない有効な媒体であるけれども、それがまたベーター読みを妨げる要因にもなるのは皮肉である。

³ 母国語に比べて感覚的理解の乏しいと思われる古典語や外国語がベーター読者を育てるのに有効な方法になることは、歴史が長く実証してきたとおりである。母国語はあまりに具体的でイメージや情緒がからみついているために、記号のように言語を操作することが難しい。外国語は語感には欠けるところがあるが、その代り、より純粹に言語で考えることができる。ゆつくり一語一語を吟味しながら未知の世界へ入って行く努力もなしやすい。純粹なベーター理解には数学のような言語を考える必要があるが、外国語や古典語は、母国語と数学的言語のいわば中間に位するのである。

古典語としての漢学、外国語としての英学をふたつながらもつことのできた明治は、

D

ということからするとかな

か得難い好機にめぐまれていたことになる。明治に硬派の言論が栄えたこと、それを支持するわずかではあるが強固な知識人層があったのは偶然ではないし、その外国理解にしても、あるいは、現代に劣らぬ深いものであり得たのも、ベーター読みが確立しやすい状況にあったことを想像させる。

一世紀を経た今日、漢学はすでに国民的教養の座を降り、外国語はむしろ E に価値を認める実用語学に変貌して、読解の伝統はいまにも消滅しようとしている。近代日本においてベーター読みを推進してきた二つの車輪とともに失ってしまったとしてもよいのである。思想がいたずらに卑俗になり、すこし抽象的な表現には読者がアレルギー症状を呈するという現象は当然の帰結である。フィロソフィー不在で、わずかに認められる理念も指導性を失っているが、大衆文化の社会において多くの読者が未知を読む力を欠いている以上いたしかたがないのであろうか。

(外山滋比古「未知を読む」による)

問1 空欄 a ~ e に入る最も適切な組み合わせを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-----|---|-------|---|-------|---|-------|
| ① | a | まず | b | しかし | c | なお | d | やがては | e | したがって |
| ② | a | やがては | b | まず | c | したがって | d | なお | e | やがては |
| ③ | a | したがって | b | まず | c | しかし | d | やがては | e | なお |
| ④ | a | したがって | b | まず | c | やがては | d | なお | e | やがては |
| ⑤ | a | やがては | b | なお | c | しかし | d | したがって | e | まず |

問2 空欄 X には、「見ることは信じること」という英語のことわざと同じ意味のことわざが入る。「百」という漢字を入れて一〇〇字以内で答えよ。

問3 本文には、次の一文がある段落の末尾から脱落している。どこに入るのが最も適切か。入るべき箇所の直前の五字を抜き出せ。(句読点も字数を含む)

【脱落文】 古来、思考の訓練のためには日常の言語を離れる必要があるとされてきたのも、ベーター読みが母国語だけでは完了しにくいことを暗示している。

問4 傍線1「純粹思考の次元において行われるべきこと」とあるが、これはどのような思考の仕方か。本文中の言葉を用いて五〇字以内で述べよ。(句読点も字数を含む)

問5 空欄AとEには「アルファ読み」と「ベーター読み」のどちらが入るか。次の中の最も適切な組み合わせを一つ選んで、番号をマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|--------|---|--------|---|--------|---|--------|
| ① | A | ベーター読み | B | アルファ読み | C | ベーター読み | D | アルファ読み | E | アルファ読み |
| ② | A | ベーター読み | B | ベーター読み | C | ベーター読み | D | ベーター読み | E | アルファ読み |
| ③ | A | ベーター読み | B | ベーター読み | C | アルファ読み | D | アルファ読み | E | アルファ読み |
| ④ | A | アルファ読み | B | ベーター読み | C | アルファ読み | D | アルファ読み | E | ベーター読み |
| ⑤ | A | アルファ読み | B | アルファ読み | C | ベーター読み | D | ベーター読み | E | アルファ読み |

問6 傍線2「アルファ読みからベータ読みへの転換」とあるが、人間はどのようなにしてベータ読みを身につけていくのか。

その説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 幼い頃はおとぎ話を、また大きくなってからは文学作品を音読してもらい、それを聞いて未知の物語の内容を推測することによりベータ読みを身につけていく。
- ② おとぎ話などの映像化されたものを見ることにより、抽象化された世界を推測し未知の世界を想像することによりベータ読みを身につけていく。
- ③ おとぎ話などの超経験的な世界を音読してもらったり、母国語で書かれた文学作品を読むことにより、より現実的な世界を推測しながらベータ読みを身につけていく。
- ④ 文学作品などを隠れ読みすることや、なるべく絵の少ない漫画を読むことにより、想像力をたくましくしてベータ読みを身につけていく。
- ⑤ 子供の頃におとぎ話を聞いて未知や抽象などを習得し、さらに成長してからは文学作品などの物語を読み未知を覗くことによりベータ読みを身につけていく。

問7 傍線3「母国語に比べて感覚的理解の乏しいと思われる古典語や外国語がベーター読者を育てるのに有効な方法になることは、歴史が長く実証してきたとおりである」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 古典語としての漢学や外国語としての英学は、感覚的な理解が難しいがゆえに実用的な性質となり、明治の知識人たちに愛されてベーター読みを可能にしたから。
- ② 語感に欠ける外国語や古典語は、数学と全く同じように抽象的で感覚的な理解ができるがゆえに、長い歴史の中で愛されてベーター読みを可能にしたから。
- ③ 外国語や古典語は記号のように言語を操作することができ、より純粋に言語で考察し抽象化することにより、未知の世界に入っていくベーター読みを可能にしたから。
- ④ 実用的な会話を重んじる外国語や教養としての古典語である漢学は、実感を尊重し内容を吟味する読解をしてきたことによりベーター読みを可能にしたから。
- ⑤ きわめて具体的にイメージしやすい母国語とは異なり、古典語や外国語はおとぎ話のように抽象的で純粋な思考がしやすいことによりベーター読みを可能にしたから。

問 8 本文の内容と最も合致するものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 分かり易いことが良いということで、具体的な図版や写真などが添えられることが好まれているが、そのようなことはベーター読みには良くないのでなるべくやめるべきである。
- ② 実感尊重主義の時代になり、映画や漫画などの視覚に訴える文化が中心になってきているが、未知を知るベーター読みの力を失わせていることになっているので子供には与えるべきではない。
- ③ 三つ児の魂百までもということわざにあるとおり、子供の頃に得たベーター読みの力は大人になっても失われることはないので、子供の時に身につけさせるのが良い。
- ④ 既知によつて理解するアルファ読みから未知を読む力をもっているベーター読みへの切り換えが必要であるが、とりわけ現在のような大衆文化の時代においてはなかなか困難なことである。
- ⑤ 母国語はベーター読みにはほとんど意味がないので、できるだけ外国語会話や漢学や数学的言語を学ぶことによりベーター読みの力をつけさせるのが良い。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

* フランクルの『夜と霧』のなかに、ある日、美しい日没を見た囚人が、「世界つてどうしてこうきれいなんだ」とつぶやく場面がある。この容易ならぬ場面¹で、一人の囚人の口をついて出たこの「どうして」という疑問詞に心を打たれたことがある。もちろんこれは問いというよりは、意味のない嘆声といった方が正しい。だがその無意味さの故に、この言葉は重大な問いとなりうる。幼児はその無垢な関心の故に、しばしばこのような根源的な問いを発する。

私が心を打たれたのは、およそ不条理なものへの、思いもかけぬ糾弾が、この言葉を背後からささえていると感じたからである。

この「どうして」に答えられるものはいない。というよりは、どのような答えも納得させることのできない問いである。

私の経験では、このような嗟歎には、多くのばあい人間的な感動がともなわれない。実際、強制収容所²の囚人にとって、彼らの現実にもかかわらず世界(自然)が美しいということは、それ自体がパラドックスであり、やりきれない現実であつて、あと一歩で嗟歎は敵意に変わらぬ。それは、いつてみれば無責任きわまる美しさであつて、自然のその無責任にまさに対応するかたちで、人間の側の無感動がある。そこでは、感動を欠落したままで美が存在しており、人間が自然と対峙^①するのは、いわば無感動の現場においてである。

極度に無感動をしいられた環境で、唐突に、そしてひととき美しく自然がかがやく時がある。その美しさは、その環境にとつてはむしろいぶかしい。「どうして」という問いは、そのいぶかしさへのまっすぐな反応である。たぶんそれは、無関心なるが故の美しさという、ある種の絶望状態への反証のようなものである。およそ人間に対する関心が失われても、なお自己にだけは一切を集中しうるあいだはこのような問いは起らない。自己への関心がついに欠落する時、そのとき唐突に、自然はその人にかがやく。あたかも、無人の生のザンショウ^②のように。

感動をとみなぬ美しさとは奇妙なものだ。それは日常しばしば出会う、感動する程ではないという美しさとはあきらかにち

がう。感動する主体がはつきり欠落したままで、このうえもなくそれは美しい。そしてそのような美しさの特徴は、対象の細部にいたるまではつきりと絶望的に美しい、ということである。いわばその美しさには、焦点というものが無い。

感動とは、情動の最も人間的な昂揚^③であるから、感動をともしなわれない美しさとは、いわば非人間的な美しさといわざるをえないが、しかしこの、非人間的であることの最大の理由は、見られるもの、たとえば自然の側にあるのではなく、見る人間の側にある。見るものの主体、感動の主体が欠落しているのである。

人は戦場で、しばしばこのような美しさに、^{おもて}面をあげた瞬間に向いあう。ミンドロ島の戦野を彷徨した大岡昇平氏に、いきなり向きあつた緑の美しさはその例であろう。この美しさは、おそらくコウリヨウと記憶され、コウリヨウたるままで回想の座へ復帰する。違和そのものとしての復帰である。

昂揚をもつて戦場の生を終らなかつたものが、もしかろうじて殺戮^⑤の場をうべなえるところなら、それはこの、主体が故意にはずされた美しさによつてである。私たちが永遠に参加できないことによつて、たしかに美しいという瞬間はあるのだ。いわばそれは、美しいものの側から見捨てられた、美しい瞬間である。

敗戦後の一時期を私もまた、この無感動の現場ですごした。二十五年囚として私が收容されたのは、東シベリヤの密林地帯、バム(バイカル・アムール)鉄道沿線の強制收容所である。強制收容所という場所は、外側からは一つの定義しかないが、内側からは無数の定義が可能であり、おそらく囚人の数だけ定義があるといつていい。私なりに定義づければ、そこは人間が永遠に欠落させられる、というよりは、人間が欠落そのものとなつて存在を強制される場所である。しかし、こういう奇妙な存在の仕方があることに思い至つたのは、それから二十年たつてからである。

この時期の私たちには、すでに生き方^⑥の問題はなかつた。生き方に代つて、生きざ^⑥ただけがサイゲンもなくあつた。私たちの行動を支配していたのは倫理ではなく、不安であつた。倫理というものが仮にもしあつたとしても、それはもはや人間のなかにはなく、自然のなかにあつた^⑦としかいえないだろう。

自然といつても、そのほとんどは樹木であつたが、私たちの目に映つた樹木の、その明確な存在の仕方は、まさに倫理そのも

のといつてよかつた。これほど明確なものを、それまでの人生に、いくつ私は見ただろうか。そして私たちが、仮にもその時の行動にやましさをおぼえたとしても、それは人間に対してではなく、自然のその明確さに対してであつたといわなくてはならない。

そしてこの無感動の現場で、幾度となく私が出会つたのは、このような自然の、³ ないような美しさであつた。

感動と、極度の無感動との一つの相似点は、そのいずれにも言葉がないことである(もつとも、このいいかたはあまり正確ではない)。ただ、感動においては、すでに存在している言葉を状況が一举に追いぬいてしまい、言葉が容易に追いつけないでいるのに対して、無感動にあつては、状況をなぞるべき言葉が文字どおりない。いわばそれは、そのままに失語状態である。精神状況の集約的なあらわれとして失語状態があることは、強制収容所という人間不信の体系の大きな特色である。

倫理が a を追い切れぬ場所で、私はこの不気味な美しさに出会つた。声もなく立ちふさがる樹木の高さは、私にはそのままに糾問の高さに見えた。 b のすべての営為が、だらけ切つた、自己弁護の姿のままでのめりこむことを、はつきりと拒む c の姿と私には映つた。 d は圧倒的な「威容」として、私の目の前にあつた。それはついに、おびやかす美しさであつたのか。その不気味さにあらためておびえたのも、その二十年後である。

おそらくは私に、体験の、主体からの自立が始まっているのではないか。そして私が、その体験を体験として、追放する時が来ているのではないか。私はそう思う。

(石原吉郎の文章による)

(注)

フランクフルト……ヴィクトール・E・フランクフル。一九〇五〜一九九七年。オーストリアの精神分析学者。

問 1 傍線①、③、⑤の漢字の読み方を、それぞれひらがなで記せ。

問 2 傍線②、④、⑥のカタカナを、それぞれ漢字で記せ。

問 3 空欄 a、d に当てはまる語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | a | 人間 | b | 人間 | c | 自然 | d | 人間 |
| ② | a | 自然 | b | 人間 | c | 自然 | d | 人間 |
| ③ | a | 人間 | b | 自然 | c | 人間 | d | 自然 |
| ④ | a | 自然 | b | 自然 | c | 人間 | d | 人間 |
| ⑤ | a | 人間 | b | 人間 | c | 自然 | d | 自然 |

問 4 傍線 1「容易ならぬ場面」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適切な説明を一つ選んで、番号をマークせよ。

① このつぶやきは、主体的に関わることができない世界の美しさというものが現実にあることを、逆説的に示す言葉だから。

② このつぶやきは、日々の暮らしに追われ、困難の連続である現実生活にまだまみれていない、天真爛漫で純粋な子どものような言葉だから。

③ このつぶやきは、美しくもはかない輝きを放ちながら沈む夕日に象徴されるように彼の抱えた状況の解決が決して簡単ではないことを示唆する言葉だから。

④ このつぶやきは、長期間にわたって囚われた者がどれほど一般社会の自由をうらやむものであるかを、よく示す言葉であるから。

⑤ このつぶやきは、世界に参加するためにはまだ長い刑期を終えなければならないという、絶望的な嘆きを伝える言葉だから。

問5 傍線2「強制収容所」とあるが、それはどのような場であると筆者は考えているか。最も的確に示す箇所を本文中から二十三字で探し、その最初と最後の三字ずつを記せ。(句読点も字数に含む)

問6 傍線3「とりつく□のない」で、「頼りにする手がかりもない」という意味の慣用的な表現になる。この□に入る漢字一字を記せ。

問7 本文の表題として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 唐突に、人間は自然に輝く
- ② 二十年後の失語状態
- ③ 無感動の現場から
- ④ 嗟歎から敵意へ
- ⑤ 心にしみる美

(三)

次の文章は、『義経記』の一節である。兄頼朝(鎌倉殿)から追討を受ける九郎判官義経と一緒に逃避行を続けていた白拍子の愛人、静御前は、雪の吉野山で義経と別れた後、捕えられて鎌倉に送られ、身籠っていた義経の子も生まれるとすぐに殺されたうえ、鶴岡八幡宮において頼朝の面前で舞を舞わされることになる。この文章を読んで、後の間に答えよ。

静がその日の装束には、白き小袖一襲ひとみまぬに、唐綾からあやを上かみに引き重ねて、白き袴踏はかまふみみしだき、割菱縫わりびしひたる水干みづぬいに、丈なる髪高たからかに結びなして、このほどの嘆なげきに面瘦おもせたる気きにて、薄化粧うすけいに眉細まゆこまやかに作りなし、皆紅みなくれないの扇あふぎを開ひらき、宝殿たからどのに向かひて立ちたりけるが、さすが鎌倉殿の御前みまへにての舞なれば、面映おもゆくや思おもひけん、舞まひかねてぞ躊躇ちゆうぢうひける。

二位殿にじうゐどのこれを御覧みまへじて、「去年こぞの冬ふゆ四国しこくの波なみの上うへにて播はられ、吉野よしのの荒あき風かぜに吹ふかれ、今年ことしは海道かいどうの長旅ながたびにて瘦すくせ衰おとろへたりと見みえたれども、静しずかを見るみるにぞ、わが朝あさに女むすめありとも知られたれ」とぞ仰おほせられける。

静しずかその日は、白拍子しろびょうし多く知しりたれども、ことに心に染しむものなれば、しんむじやうの曲うたといふ白拍子しろびょうしの上手うまなりければ、心こころも及およばぬ声こゑにて、はたと上げてぞ歌うたひける。上下じやうげ「あつ」と感あずる声こゑ、雲くもに響こくばかりなり。近ちかくは聞ききて感あじけり。声こゑも聞きこえぬ上の山やままでもさこそあるらめとて感あじける。

しんむじやうの曲うた、半なからばかり数かずへたりける所に、祐経すけつね心こころなしと思おもひけん、水干みづぬいの袖そでを外はして、せめをぞ打うちたりける。静しずか、「君きみが代しろの」と上げたりければ、人々ひとびとこれを聞ききて、「情なさけけなき祐経すけつねかな。今いま一折舞ひとせりはせよ」とぞ申ましける。詮かたずる

所敵かみたきの前の舞まぞ X。思おもふ事を歌うたはばや思おもひて、

しづやしづ しづのをだまき 繰くりり返かへし 昔むかしを今いまに なすよしもがな

吉野山 峯かみの白雪しろゆき 踏ふみ分わけて 入いりにし人の 跡あとぞ恋こしき

と歌うたひたりければ、鎌倉殿かまくらどの、御簾みすだをさつと下くだし給たまひけり。

鎌倉殿かまくらどの、「白拍子しろびょうしは興醒きやうせいめたるものにてありけるや。舞まの舞まひ様さま、謡うたひの歌うたひ様怪あやしからず。頼朝よりとも田舎人いなかひとなれば、聞きき知らじとて歌うたひたるか。『しづのをだまき繰くりり返かへし』とは、頼朝よりともが世よ尽つきて、九郎くわうらうが世よになれとや。あはれおほけなく思おもひたるものかな。

『吉野山峯の白雪踏み分けて、入りにし人の』とは、たとへば、
なれ。あ憎し憎し」とぞ仰せられける。
A、B を攻め落とすと雖も、未だありとござん

C これを聞こし召して、「同じ道のものながらも、
Y ありてこそ舞ひて候へ。
D ならざらん者はいか

でか御前にて舞ひ候ふべき。たとひ如何なる不思議をも申し候へ、女ははかなき者なれば、思し召し許し候へ」と申させ給ひければ、御簾の方々を少し上げられたり。

静、悪しきこ気 H と思ひて、また、立ち返り、

吉野山 峯の白雪 踏み分けて 入りにし人の 跡絶えにけり

と歌ひたりければ、御簾を高らかに上げさせ給ひて、「軽々しくも褒めさせ給ふものかな」と言ふが先もあり。二位殿より御引き出物、広蓋*ひろがたに衣賜*まぎひけり。鎌倉殿より、貝摺*かいずりりたる長持三枝給はる。*えび

(注)

唐綾……中国伝来の綾織物。

割菱……紋所の名称。

宝殿……神殿。

面映ゆく……気恥ずかしく。

二位殿……頼朝の妻、北条政子。

白拍子……平安時代末期から鎌倉時代にかけて流行した歌舞。またそれを舞う遊女。鼓・笛などを伴奏に歌いながら男装で舞った。ただし、ここではその曲のことを指す。

はたと上げて……一段と声を張り上げて。

数へ……ここでは、「歌ひ」に同じ。

祐経……工藤祐経。伴奏の鼓の担当であった。

せめ……曲の終わり近く、高声に急調子になる部分。

一折……舞や曲などの一区切り。

おほけなく……身のほど知らずに。

未だありとござんなれ……まだ健在だというのだな。「ござんなれ」は「にこそあるなれ」の約。

不思議……非常識なこと。

方々……片方。端の方。

「軽々しくも褒めさせ給ふものかな」と言ふが先もあり。……このあたりやや文意不明ながら、「軽々しくお褒めになること

よ」とまず囁いた者がいた、との意か。

広蓋……元來は衣装箱の蓋。衣服などを賜うときにこれに載せた。

貝摺りたる長持……青貝を模様として摺り込んだ長持。螺鈿の長持。

枝……昔、贈り物を花の枝に添えて与えたことから贈り物を教える単位。

問1 空欄イ・ロ・ハには、読み方はそれぞれ異なるが、同じ漢字一字が入る。その漢字を答えよ。

問2 傍線a「去年」の読み方をひらがな二字で答えよ。

問3 傍線b「さこそあるらめ」の文法的説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 副詞「さこそ」＋ラ変動詞「あり」の連体形「ある」＋推量の助動詞「らむ」の已然形「らめ」
- ② 副詞「さ」＋係助詞「こそ」＋ラ変動詞「あり」の連体形「ある」＋推量の助動詞「らむ」の已然形「らめ」
- ③ 副詞「さ」＋係助詞「こそ」＋ラ行下二段動詞「ある」の連体形「ある」＋推量の助動詞「らむ」の已然形「らめ」
- ④ 代名詞「さ」＋係助詞「こそ」＋ラ変動詞「あり」の連体形「ある」＋推量の助動詞「らむ」の已然形「らめ」
- ⑤ 代名詞「さ」＋係助詞「こそ」＋ラ行下二段動詞「ある」の連体形「ある」＋推量の助動詞「らむ」の已然形「らめ」

問4 空欄X(二か所)に入る終助詞として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① か し
- ② かな
- ③ か も
- ④ な む
- ⑤ ば や

問5 傍線C「しづやしづ しづのをだまき 繰り返し 昔を今に なすよしがな」の歌は、『伊勢物語』三段の「いにしへのしづのをだまき 繰り返し 昔を今に なすよしがな」を本歌としている。この本歌において、「しづ」は「倭文」で、昔の織物の一種、「をだまき」は「しづ」を織るための糸を巻いたもので、「いにしへのしづのをだまき」は「繰り返し」を導く序詞である。以上を踏まえると、「しづやしづ しづのをだまき 繰り返し」の部分は、どのような意味になるか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 静の倭文よと繰り返し私の倭文を織ってくださった
- ② 静の倭文よと繰り返し私の織った倭文を着てくださった
- ③ 倭文よ倭文よと繰り返し私の織った倭文を褒めてくださった
- ④ 静よ静よと繰り返し私の名を呼んでくださった
- ⑤ 鎮や賤と繰り返し私の名を間違えながらも書いてくださった

問6 空欄A・B・C・Dに入る人名の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- | | | | | |
|---|------|------|-------|-------|
| ① | A 頼朝 | B 九郎 | C 静 | D 二位殿 |
| ② | A 頼朝 | B 静 | C 二位殿 | D 九郎 |
| ③ | A 頼朝 | B 九郎 | C 二位殿 | D 静 |
| ④ | A 九郎 | B 頼朝 | C 静 | D 二位殿 |
| ⑤ | A 九郎 | B 頼朝 | C 二位殿 | D 静 |

問7 空欄Yに入る、「ものをあわれむ心。風雅を理解する心」を意味する語を二字以内で記せ。

問8 傍線d「御簾を高らかに上げさせ給ひて」とあるのは、頼朝が機嫌を直したことを表しているが、頼朝はなぜ機嫌を直したと考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 静が歌詞の一部を変えて歌い直しながらも一度舞い直したその姿があまりにもあでやかで美しく心底感動したから。
- ② 静が義経が行方知れずとなってしまう内心嬉しく思っていることを示唆する歌詞に変えて歌を歌い直したから。
- ③ 静が義経が亡くなってしまったことを知り、悲しみにくれている心情を吐露する歌詞に変えて歌を歌い直したから。
- ④ 静が義経が行方知れずというだけでなく、その子どもが亡くなったことも示唆する歌詞に変えて歌を歌い直したから。
- ⑤ 静が歌い直した歌が歌詞の一部を変えたただけなのに大変素晴らしいものになったことに大いに感心したから。

問9 『義経記』とほぼ同時代の成立とされる作品を次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 保元物語
- ② 平治物語
- ③ 平家物語
- ④ 承久記
- ⑤ 曾我物語